

時は19世紀初頭のヨーロッパ。

ブルル・・・ブルル・・・

馬の鼻嵐が聞こえる中、村人たちが使う馬の管理をしている馬番のジョンは黙々と作業中。

井戸から水を汲み水飲みを満たすと馬が首を出して水を飲む。

従弟のモーリスがさぼっていないかどうか横目で確認をしながら馬小屋を掃除し、干し草を与えスキップを兼ねて一頭一頭ブラシをていねいにかける。

その日貸し出しがない馬がいればその馬に乗って夕方になるまでジョンが運動を兼ねて片道一時間程度の範囲を遠乗り。

そんな日々を過ごしているジョンの顔はとても日に焼けて栗毛色の馬を思わせる褐色の肌。

季節問わず腕まくりをして作業をしているせいで腕全体が褐色で、汗を拭く時にブラウスの襟もとからちらりと見える隠れた部分だけが彼が元々色素の薄い肌であることを物語る。

ゆるいくせ毛が入ったダークブラウンの髪を短く切っていたが、元々あまり身なりに気を使う方ではないせいで今はあごまで伸びている。

年齢は24歳で独身。

両親は数年前に他界し一人暮らしをしている。

小さな村なせいかそろそろ近辺の村から結婚相手を探してはと村長に言われているが、結婚相手はなかなか見つからなかった。

原因は2点。

まず天使ミカエルを思わず整った顔立ちの男なのに、三白眼の吊り目が災いして真顔だと怒っているように見えたこと。

そして馬番の作業や乗馬でたくましくなった細くも屈強な肉体と身長180cmという身長が他人を拒絶する尖った雰囲気と相まってとても威圧感を与えたこと。

この眼と威圧感のせいで多くの女性はジョンを恐がり、酒場で酔っぱらって暴れる男ですらジョンがにらむと大人しくなった。

しかしこの村にもそんなジョンを恐れない人物が何人かいる。

村の神父ソレル、おじのボエスチオー、隣に住む世話焼きおばさんのマリア、モーリス、そして4歳年下で去年両親が他界して一人暮らしをしている幼馴染。

「ジョン」

名前を呼ばれてジョンが振り返ると馬小屋の入り口のところにその幼馴染でジョンの家の三軒隣にあるこの村で薬屋兼診療所を営む薬作り師のリリーがいた。

クリーム色のブラウスと茶色のスカートで手にはバスケットを下げている。

年の頃は20歳。

身長は145cm。体型は端的に言えばスレンダーでどこにでもいる体型。

顔は宗教画の天使を思わせる愛らしさがあり、それは幼い頃から全く色が褪せていないはちみつ色のくせ毛でさらに天使のような印象になっていた。「あ！？リリー！今日も差し入れ持ってきてくれたの？」

モーリスが作業の手を止めてリリーの所に駆け寄るとバスケットに注目した。

「うん。昨日はダンディーライオンがたくさん採れたから花と葉っぱをソテーにしたのをサンドイッチにしてみた。畑で採れたレタスも入っているよ」

「やった！ありがとう！」

そう言いながらモーリスがバスケットにかけられたほこり避けの布をめくると、中からはチーズとレタスが挟まれたサンドイッチが見えた。

「美味そう」

「モーリス！！」

モーリスとリリーが話しているのを見たジョンの怒声が響く。

モーリスは怒られ慣れているのかペロッと舌を出す。

「やっべ。これ昼飯に食べるね。いつもありがとう」

「うん」

リリーは馬小屋の中に進みきゅう舎のなかで黙々と馬の体にブラシをかけ続けるジョンの前で足を止めた。

「・・・なんだ？」

いかにも「仕事の邪魔だ」と言わんばかりの空気を漂わせながらジョンがリリーに顔を向ける。

「ジョン、いつ見ても背が高くっていいよね。あたし絶対馬の背中まで手が届かないもん」

「大体の奴は手を伸ばせば届く」

「無理無理。ねえ、そっち行っていい？」

「ダメだ」

「えー??あたしも馬のブラシかけしてみたいー」

「遊びじゃない」

「ケチ！」

ブラシをかけ終わるとジョンは馬の足を持ち上げて馬蹄を軽く叩き始める。

「ねージョン。それいつもやっているけど、どんな意味があるの？」

「馬蹄がぼろになっていないかの確認だ」

「確認？」

「ああ。こいつは今日城下に行く予定になっている」

城下というのはこの村から4時間ほど馬を走らせた先にある中心地街のこと。

「ずいぶん遠くに行くんだね」

「ああ。だから今のうちにちゃんと蹄と馬蹄の準備をするんだ」

リリーは馬蹄の確認をするジョンの背中にとても誇らしそうな気配をみた。

その気配は人に対する尖った雰囲気とは真逆でとても温かみにあふれている。

「ねージョン」

「なんだ」

「どうせ隣からおすそ分けもらっているのなら今度うちに来てよ。あんたが好きなジャガイモとチーズのスープ作るよ？」

「誰から聞いた？」

「マリアおばさん」

ジョンはチッと軽く舌打ちをすると悪い人間ではないのだがおしゃべりな隣の住民のことを少し恨んだ。

「ねージョン。いいでしょー?あたし一人でご飯食べるの寂しくていやー」

馬の足を地面に下ろしてからジョンが後ろを振り返ると、リリーは柵にもたれかかり退屈を持って余してダダをこねる子供のような顔をしていた。

「ねージョンー。一人でご飯食べるとかってきーみーしーいー」

ジョンは少しの間リリーの顔を見ると小さく舌打ちをした。

「分かった。今晚だけだぞ？」

「やったー!楽しみにしているね！」

リリーはさっと柵から離れると軽やかな足取りで馬小屋を後にした。

季節は夏になりリリーの薬草採取作業は一番忙しい時を迎えていた。

しかしジョンとモーリスへの差し入れだけは欠かさず、今日は昨日採れたラズベリーを入れたパイをバスケットの中に入れ持参。

「ジョン！・・・あれ？」

二人が確実にいる時間帯を狙ってきたはずなのに、馬小屋に人はいない。

馬小屋に入ってジョンかモーリスの姿を探していると馬小屋の裏にある井戸の辺りから水音。

（なんだろう？）

リリーはそちらに行き物陰から顔を出した。

そこにはこちらに背を向け全裸で水浴びをするジョンの姿。

リリーの存在に気がついていないのか馬小屋の作業をしている時同様黙々と井戸から水を汲んでは頭からかぶっている。

首の後ろと腕に日焼けがあるせいか、ジョンの後姿はベージュ色の衣服を着ているようにも見えた。

しかしよく見てみれば背骨を中心に乗馬で鍛えられた筋肉がくっきりとした凹凸を作りベージュ色の部分は衣服ではないことを明確に示していた。